

物故者供養読経
式辞 オランダ総領事館総領事

ヤン デフリース氏

金沢市長

山出 保氏

日本医史学会理事長

蒲原 宏博士

一、特別講演

演題 吉田長淑先生の生涯

午後三時

一、懇親会

前金沢医科大学教授 寺畑 喜朔博士

午後四時

日蘭交流四百年物故者法要実行委員会

実行委員長 多留 淳文

実行委員 岡部佐武郎

平田富美子

坂井 昭保

赤座 数男

高村 千波

江間富喜子

在田 全龍

棟岳寺住職

事務局連絡先 電話〇七六一二二二一―二六四七

在田 全龍

日本医史学会関西支部平成十二年秋季大会

長門谷 洋治

日本医史学会関西支部平成十二年秋季大会は同年十一月十二日(日)に第四十回医学史研究会(小松良夫代表幹事)との合同総会として大阪府保険医協会(大阪市浪速区)で行なわれた。今総会の特徴は「日本学術会議第七部 医学史・医学研究連委員会」とも共催になったことで、当日午後ミニ・シンポジウム「医学資料の保存と管理」と題して実施された。本テーマについて以前より活発に発言・実践しておられ、今回のシンポの推進者でもあった寺畑喜朔氏が座長をつとめられ、最初に「本シンポジウムの主旨」につき述べられた。シンポジストは奥沢康正、松田武、三宅宗純、小松良夫の各氏で、松田氏は「大阪大学医学部『医学史料室』」といういわば公的な機関のそれについて、小松氏は個人で「杏(あんず)資料館」なる二階建ての資料館を建て、結核関係の資料・文献を集めていたのを一般に公開する準備を進めている。三宅氏は代々受け継がれてきた膨大な文書、図書を如何に整理・保管していくかにつき、奥沢氏は眼科関係中心の医療機器をJRの貨物車の払い下げを受けて収納、これをコンピュータ管理するなど収集の発想そのものが頭抜けている。その後の討論では古書の虫食いの予防につき、内藤記念くすり博物館の稲垣裕美氏より専門的な助言をいただくなど充実したもの

となった。

今回の特別講演は石田純郎氏「アジア医史跡散歩」である。海外に出る医学関係者は多いが、系統的に医学史跡を訪れ、それを記録してガイドブック的な商業出版にまで持っていけるのは石田氏以外にはいないのではないか、今回はとくに邦人の訪問も少ないアジア各地の医史跡について多数のスライドを用いて紹介された。

当日は一般演題六題の発表もあり、丁々発止の討議が行なわれた。

本年は十月十四日・十五日に京都市で第百一回日本医史学会が行なわれ、それから一ヶ月も経っていなかったが、多くの会員の参加があり、熱気のこもった活気ある学会になったことをよろこびたい。

例会抄録

橋本伯寿『断毒論』の刊行年について

深瀬泰且

橋本伯寿は『断毒論』をあらわして、痘瘡や麻疹、梅毒、疥癬が伝染病であることをはじめて唱えて、世に警鐘をならした。これはそのころの慣習による漢文表記の著述であるが、広く読んでもらうために漢字仮名混じり文であらわすことの

必要を認識して、漢文を国字になおして発刊した『翻訳断毒論』や『国字断毒論』もある。これによって三種、五冊の流布本が現存している。しかし『国書総目録』をはじめ各種の目録をみると、三種の刊本の扱いや、刊行の年が区々であることに戸惑いを感じることもある。

これら三種の『断毒論』は、書名の相違からそれぞれ独立に発刊されたと考えるのが現今の通説のようであるが、『断毒論』を書誌学的に考察することによって、これらが『断毒論』と『翻訳断毒論』のグループと、『国字断毒論』にわけて刊行されたと考えられるものである。なお本論においては山崎本(順天堂大学山崎文庫所蔵)と、北里本(北里研究所東洋医学研究所所蔵)を考察の対象とした。

『断毒論』の封面には「三巴先生著／断毒論 全 附翻訳一卷／東都書肆 文刻堂 慶寿堂 発行」としてなされている。この「附翻訳一卷」の意味するところを、伯寿はどのような意図で記載したのかにまず考察をくわえたい。

『断毒論』の凡例に「前編ハ句読ヲ加工、後編ハ国字ヲ以テ之ヲ訳ス」とあるように、漢文をもってあらわされた二冊が前編であり、国字をもってあらわされた附録は後編であるという。伯寿自身は三冊をもって一連の刊行物であるとの認識をもっていた。

北里本の題箋には「断毒論 天」と「断毒論 地」、そして「翻訳断毒論 人」と記載されている。書名は異なるが「天地人」と一括して表記していることは、これらが三冊本である